

ナッジ理論を用いた看護師国家試験対策

～学習のきっかけづくりを目指した学習支援の効果～

NATIONAL EXAMINATION FOR NURSES WITH NUDGE THEORY

– EFFECTIVENESS OF LEARNING SUPPORT AIMED AT CREATING LEARNING –

遠藤 美穂子 ・ 岡崎 優子 ・ 佐藤 清湖 ・ 高橋 由美
ENDO Mihoko, OKAZAKI Yuko, SATO Kiyoko, TAKAHASHI Yumi

東海林 美幸 ・ 二口 尚美 ・ 末永 カツ子
TOUKAIRIN Miyuki, FUTAKUCHI Hisami, SUENAGA Katsuko

キーワード：看護師国家試験 学習支援 ナッジ理論 学習のきっかけ 最上級生

Key words : National Nursing Examination, Study materials, Nudge theory,
Impetus and motivation for learning, Senior students

要 旨

本研究は看護師国家試験（以下、国試）学習のきっかけづくりを目指したナッジ理論を活用した学習支援の効果を検討することを目的とした。ナッジ理論を用いた学習支援として【なんかできそうだより】【国試出題形式問題の反復学習】【模擬試験結果のキセキ】【トイレの紙様】を作成し、最上級生に介入を行った。学習支援の効果を検討するために学習支援開始前・中間・終了時に質問紙調査及び学習支援を活用した学生の感想についてインタビュー調査を行った。結果、国試学習にすでに取り組んでいた学生は7月60.9%、10月76.6%、12月86.4%であった。学習支援で最も活用されたものは【国試出題形式問題の反復学習】であり、約7割が活用していた。一方、【トイレの紙様】の活用は約3割にとどまり、活用が<E: Easy>ではないことが要因であった。学習のきっかけとなったと考えられる学習支援は【なんかできそうだより】【国試出題形式問題の反復学習】【模擬試験結果のキセキ】であった。4つの視点で学習支援を工夫して学生に提示したことにより、学生が自分にあった学習の方法を検討する材料につながったことが示唆された。

Abstract

The purpose of this research is to review the effects of the study materials that utilized Nudge Theory and see if they created impetuses and motivation for studying and preparing the National Nursing Examination (NNE). We created the following study materials: “Nankadekisoudayori,” “NNE-Type Question Drills,” “Mock Examination Miracle,” “Toilet-no-Kamisama” booklets and newsletters. Then, we introduced these study materials to the senior students. To review the effects, we implemented paper questionnaire surveys before, during, and after the study materials were introduced. The survey was to understand (1) the utilization status of the study materials, and (2) the amount of time spent on study. Additionally, we conducted interviews to research the opinions of the students who utilized the study guidance. The results were that the ratio of students who had already begun studying for the NNE were 60.9% in July, 76.6% in October, and 86.4% in December. Out of the study materials that we made, the “NNE-Type Question Drills” was the most utilized, with approximately 70% of the students using it. On the other hand, utilization of “Toilet-no-Kamisama” was limited to approximately 30% due to it necessitating work before it could be utilized. The study materials that created the impetus to study and motivated learning were the “Nankadekisoudayori,” the “NNE-Type Question Drills,” and the “Mock Examination Miracle” booklets and newsletters. It was suggested that the fact that the Study materials could be devised and presented to the students from four perspectives led to the material for the students to consider the learning method that suits them.

I. 緒言

昨今、医療の高度化、社会構造の変化、新たな感染症の蔓延などを受けて、看護師に求められるものもより専門的、より包括的になってきている。そのような中、看護系人材の養成を使命とする看護系大学の役割は大きく、とりわけ、看護職者としての基礎的知識や技術を身につけた看護師資格取得者の輩出が望まれる。看護師資格取得のためには、国試に合格することが必須である。A短期大学看護学科においては、1年次から国試ガイダンス、校外模擬試験、業者による補講など看護師資格取得に向け国試対策委員を中心にチューター制度学生支援教員と協働しながら国試対策を行っている。

国試の問題で問われる内容は、医療現場での第一歩を踏み出す際に必要な基本的な知識及び技能である [1] ことから、日々の講義、演習、実習の授業で学修する内容が国試の出題並びに国試学

習につながると言えよう。しかし、看護学導入時期の学生は、今までとは異なる学習方法に困難を抱えたり [2]、その後も学習習慣が確立されていなかったり [3] と学習に関する課題を抱える学生は少なくない。さらに国試対策に関し学生は不安を抱え、学習方法の戸惑い、学習の先延ばしなどにより学習が進んでいない状況が指摘されている [4]。武政ら [5] は、eラーニング学習を用いた学習支援を行った結果、国試への動機づけは学業成績を促進することを明らかにする一方、今後の課題として、先延ばし行動をとる学生への対処などを報告している。A短期大学の最上級生の学生からも、国試学習に対して「なにをどうやったらよいかわからない」「やらなくてはならないことはわかっているが、取りかかれない」「実習で国試学習まで手が回らない」などの声も聞かれ、学生は国試学習の必要性を理解しているものの国試学習に取りかかれずに先延ばしにしている状況が見受けられた。そこで、学生が国試学習に早期

に取りかけられるような学習のきっかけづくりとなる学習支援が必要であると考えた。

近年、「ナッジ (nudge) 理論」が様々な分野に応用されはじめている。ナッジとは、「“ヒジで軽く突く” という意味であり、行動経済学や行動科学分野において、“選択構造” という“選択肢を提示する形” を利用して行動変容を促す戦略の事である。つまり人々が強制によってではなく自発的に望ましい行動を選択するよう促す仕掛けや手法のこと」 [6] であり、ナッジ理論の活用のフレームワークとして、「EAST」 (Easy: 簡単、Attractive: 魅力的、Social: 社会的、Timely: タイムリー) があげられている [7]。国内では、環境省による「省エネ教育プログラム」への活用 [8]、新型コロナウイルス感染症対策における自発的な行動変容の促進 [9] に用いられている。また、健康・医療分野では検診受診率向上などの効果が報告されている [7]。学校教育の学習の場でも、望ましい行動に導く活動の一部フレームとして活用され、仕掛けそのものによるものと、仕掛けを媒介として生じる相互作用により便益が向上することが示唆された [10]。しかし、看護基礎教育での研究はみあたらない。

今回、年度内に国試受験を控えた最上級生を対象に、国試学習のきっかけづくりを目指したナッジ理論を活用した学習支援を実施してその効果を検討したので報告する。

II. 研究目的

本研究は、国試学習のきっかけづくりを目指したナッジ理論を活用した学習支援の効果を明らかにすることを目的とする。

III. 用語の定義

1. きっかけ: 「物事を始めるはずみとなる機会や手がかり」 広辞苑 第六版 岩波書店
2. 先延ばし: 「自己のコントロール下にあり、主観的に重要であると思われる課題の遂行を、一時的または完全に

回避したり、そのことから逃避すること」 [11]

3. チューター教員: 「チューター制度学生支援 (大学での履修科目や生活に適応する上で、学業上の相談や助言を行い、学生の主体的な学修成果が得られるように支援制度) の基、小グループの学生を継続的に支援する教員」

IV. 研究方法

1. 研究対象者

A 短期大学看護学科3年生 (最上級生) 86名

2. 研究期間

2021年5月～2022年3月

3. 学習支援概要

本学習支援は、ナッジ理論を基盤とし、学習支援①【なんかできそうだよ】、学習支援②【国試出題形式問題の反復学習】、学習支援③【模擬試験結果のキセキ】、学習支援④【トイレの紙様】の4つの学習支援で構成し、学生のきっかけづくりのための国試対策として実施した。本研究のフローチャートを図1に示す。また、本研究に参加しない学生に不利益が生じないよう、学習支援の利活用は学年全体に発信することを前提として作成した。

ナッジはリバタリアン・パターナリズムの思想に基づいている。具体的には個人的な自由を重視する自由主義の〈リバタリアン〉と、相手のことを思いやり、これがいいと押し付ける介入主義、父権主義の〈パターナリズム〉の双方を組合せて、個人の行動や選択の自由を阻害せず、かつ「より良い結果」誘導するという思想である [12]。学習支援内容はナッジの思想に基づき、学びの主体である学生の主体性や自律性を尊重しつつ、国試学習に取り組むという望ましい結果につながるきっかけづくりとなるよう作成した。ナッジの戦略を考えるためのフレームワークは、E: Easy、A:

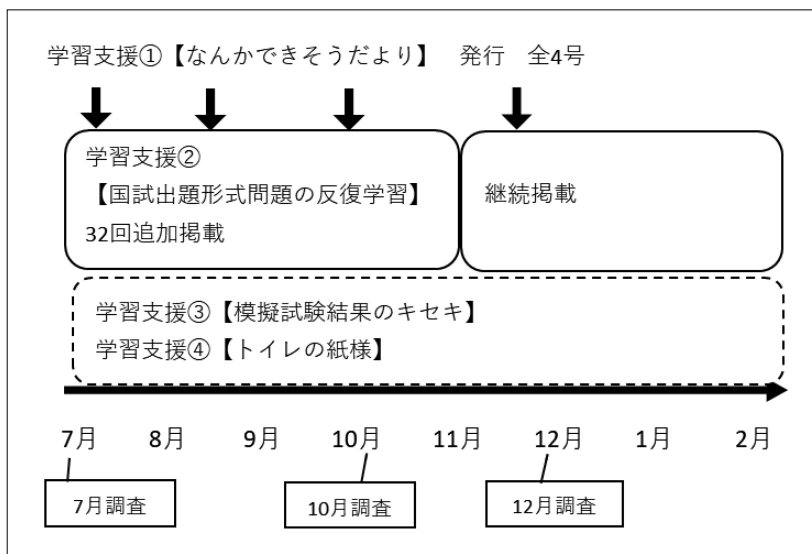


図1 学習支援及び調査時期のフローチャート

表1 ナッジのチェックリスト

E	Easy	簡単なものになっているか 情報量は多すぎないか 手間がかからないか
A	Attractive	魅力的なものになっているか 人の注目を集めるか 面白い
S	Social	社会規範を利用しているか 多数派の行動を強調しているか 互惠性に訴えかけているか
T	Timely	意思決定をするベストのタイミングか フィードバックは早い

出典：引用文献 [13]

Attractive、S：Social、T：Timelyとされ、その「ナッジのチェックリスト」[13]を表1に示す。

以下に本学習支援の4つの内容を具体的に示す。

1) 学習支援①【なんかできそうだより】(図2)

本学習支援の周知と学習支援の利活用を促す内容やクラスメイトにインタビューした学習状況などの内容で構成した便りである。最終号はクラス委員からクラス全体に向けての応援メッセージを掲載した。作成時は情報量が多くなりすぎないように内容を精選し〈E：Easy〉、かわいいイラストの使用やクラスメイトのインタビューを掲載して〈A：Attractive〉、「みんな学習している」というメッセージ性を持たせる〈S：Social〉こと

などに留意した。なんかできそうだよりはA短期大学で使用しているLMS(Learning Management System)を利用し、LMSにアップするとともに、学生全員に配布した。

2) 学習支援②【国試出題形式問題の反復学習】

LMSを利用し、国試出題形式問題の反復学習により知識の定着を促進する学習支援である。問題は1セット5問程度とし、1週間ごとにLMSに新たな問題を追加掲載した。作成時は学生が普段使用しているLMSを利用して1回5問とし短時間でも取り組める〈E：Easy〉、解答前に問題の正答率や難易度を確認できるように表示して〈A：Attractive〉、解答後に正誤がすぐ把握できる〈T：Timely〉ようにした。掲載した問題は当該学生

国試学習支援だより なんかできそう

Vol.2
2021.08.17 発行
国試対策
学習支援研究会

インタビュー「あなた今何してる？」特集


*** クラスの何人かに教えていただきました！**

・過去問を解く→間違えた問題をチェックしておき、ノートにまとめる（教科書やRBで内容を確認）
 ・数日後、間違えた問題をもう一度解く。
 ・国家試験出題基準と白い紙を準備してどのくらい理解しているか（疾患であれば特徴や看護などが書けるか）確認する。
 ・寝る前に自分の弱い部分の暗記→寝ながらの回想→翌朝、白い紙に書き出す。

A さん

・2〜3日でQBの1単元が終わるように目標を決めて解いる。
 ・QBの解説でレビューブックに載っていないところ等は付せんに書いて貼っています。

B さん



【毎日】・状況設定 2〜3問
 ・必修問題 10〜15問
 ・一般問題 2〜5問
 ・分からない時は、分かる単語がないか見る。
 ・分からない時は、単語から詳しく調べる。

C さん


・毎日、学修時間を決めて取り組む。
 朝 10時スタート！
 「とりあえずやる」

D さん

・GBの問題集を何かしらの領域を毎日解く。間違ったところは解説を読み、レビューブックに付け足す。問題の出方もわかるようにレビューブックに書くようにしている。
 ・領域実習前と後にその領域の問題を解く。
 ・模試後は、必ず一問ずつ復習する。
 ・レビューブックは、イラストを付け足したり、色を付けたり、自分が見やすいように作る。

E さん


インタビューに快くお答えいただいたみなさん、ありがとうございました。
 「できそうかも」「いいかも」と思った方は参考にしてみましょう。
 次にインタビューを受けるのはあなたです！



なんかできそう LMSで展開中 ご活用下さい	
LMS「3年生国家試験対策関連2021」コース内	
①	必修問題にチャレンジ ◆あなたはどの程度の正答率なら正答できる？
②	一般問題にチャレンジ ◆五臓六腑得意なものを探せ、そして伸ばせ！
③	暗記トレーニング ◆【トイレの紙様】を信じろ！

クラスの人がやってるんだったら私たちもできそうだね？
LMSも見てみよう。

そうね



第3号に続く…

図2 支援①【なんかできそうだより】

が1年次、2年次に国試対策として受験した模擬試験問題を中心に構成した。その理由として、学生が模擬試験解説書を使用して問題の振り返りができるからである。また、LMSへの問題の掲載は正答率の高い問題から低い問題、またはやさし

い問題から難しい問題へと順序性を教員が考慮し、学生が「できた。続けられそう」という思いを抱き、学習を継続できるようにした。

3) 学習支援③【模擬試験結果のキセキ】(図3)

3年次に受験した国試模擬試験の得点をプロッ

トし線で結び、得点の推移を図式化する。それにより、模擬試験の結果及び推移を1枚のシートで把握できる用紙とした。また、模擬試験の受験前に目標得点・得点率を記入する欄を設け、学生が目標を持ち模擬試験に臨めるようにした。作成時は学生が各回の模擬試験得点をプロットする〈E: Easy〉、その際に模擬試験受験者全体の得点と自己の得点の比較ができるように偏差値を記入し〈S: Social〉、模擬試験結果を記入することにより得点の推移が一目で把握できる〈T: Timely〉ことに留意した。

4) 学習支援④【トイレの紙様】

学習支援④は国試出題の評価領域分類(Taxonomy) I型: 単純な知識の想起によって回答できる問題 [1] の暗記対策である。前述の学習支援②と同様に反復学習により知識の定着を促進する学習支援である。所定用紙(図4)に切り込みを入れ、表面に問題を記入し裏面に回答を記入し作成する。作成した用紙をトイレや学習机等の1日数回学生が目にする場所に貼り、使用時は用紙をめくり知識を確認する。作成時は一度用紙を作成すると長期間利用できる〈E: Easy〉、めくって解答を確認することでゲーム性をもたせる〈A: Attractive〉ことに留意した。

4. 調査方法と内容

1) 質問紙調査

(1) 調査目的及び方法

学習支援開始前・中間・学習支援終了時の学生の学習状況、ナッジ理論を活用した学習支援の活用状況を把握することを目的とした。調査は自記式質問紙調査を用いた。研究参加の同意が得られた対象者に質問紙、提出用封筒を配布し、質問紙回答後に対象者自身による封入、厳封を行った後、学内に設置されたレポートBOXに提出とした。調査は学習支援開始前の7月(以下、7月調査)、学習支援開始後3か月の10月(以下、10月調査)、学習支援5か月後の12月(以下、12月調査)の3回実施した。調査時期は本調査による学生の負担を考慮し、実習期間との重複をさけて設定した。

(2) 調査内容

① 学習開始時期

本格的な国試対策学習の開始時期について、「すでに始めている」「これから始める予定である」「具体的には決めていない」から最もあてはまるものを尋ねた。

② 国試学習時間

直近1か月の国試を意識した学習時間(平日・休日)それぞれについて、「0分」「30分」「1時間未満」「2時間未満」「2時間以上」から最もあてはまるものを尋ねた。

③ 学習支援活用状況

学習支援①～④のそれぞれの活用の有無について尋ねた。

2) グループインタビュー調査

(1) 調査目的及び方法

「ナッジ理論」を用いた学習支援を含め、学生にとって何が国試学習の開始のきっかけになっていたのか、具体的な内容について検討することを目的とした。インタビューの進行上の指針となるように安梅(2007)[14]を参考に、①目的、②対象、③インタビュー内容、④方法、⑤分析で構成されたインタビューガイドを作成し、インタビュー前に研究者間で共有した。グループインタビューは国家試験後の3月中旬に行い、対象者は本研究の同意が得られた学生のうち、グループインタビュー調査協力の同意が得られた5名とした。グループインタビュー調査はCOVID-19感染予防の観点からオンラインとし、時間は40分間であった。調査を実施した研究者2名は各自の研究室から参加し、1名はインタビュー、1名は録音をした。インタビューの内容は対象者の承諾を得てICレコーダーに録音し、音声データから逐語録を作成した。

(2) 調査内容

調査内容は、①国試学習開始時期及び学習のきっかけについて、②学習支援の活用状況及び改善点、③どのようなきっかけがあると早期に国試学習に取り組めると考えるかの3点とした。

2021年度 看護師国家試験対策 模擬試験結果のキセキ ◆その都度、結果を記入し線でつないでいこう！



グループ G 学籍番号 氏名

模試月日	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()		
模試名												
必修 正答率 (%)	100										80	一般・状況 偏差値 (全国)
	90										70	
	80										60	
	70										50	
	60										40	
	40										30	
目標得点 必：必修 -：一般 状：状況設定	必： <u> </u> /50	必： <u> </u> /50	必： <u> </u> /50	必： <u> </u> /50	必： <u> </u> /50	必： <u> </u> /50	必： <u> </u> /50	必： <u> </u> /50	必： <u> </u> /50	必： <u> </u> /50		
	-： <u> </u> /130	-： <u> </u> /130	-： <u> </u> /130	-： <u> </u> /130	-： <u> </u> /130	-： <u> </u> /130	-： <u> </u> /130	-： <u> </u> /130	-： <u> </u> /130	-： <u> </u> /130		
	状： <u> </u> /120	状： <u> </u> /120	状： <u> </u> /120	状： <u> </u> /120	状： <u> </u> /120	状： <u> </u> /120	状： <u> </u> /120	状： <u> </u> /120	状： <u> </u> /120	状： <u> </u> /120		
目標達成度 (0~100%)												

* 1年間を使用します。「模試結果」、「模試自己採点用紙」等と一緒に保管しましょう。また、面談時は必ず持参ください。

図3 支援③【模擬試験結果のキセキ】

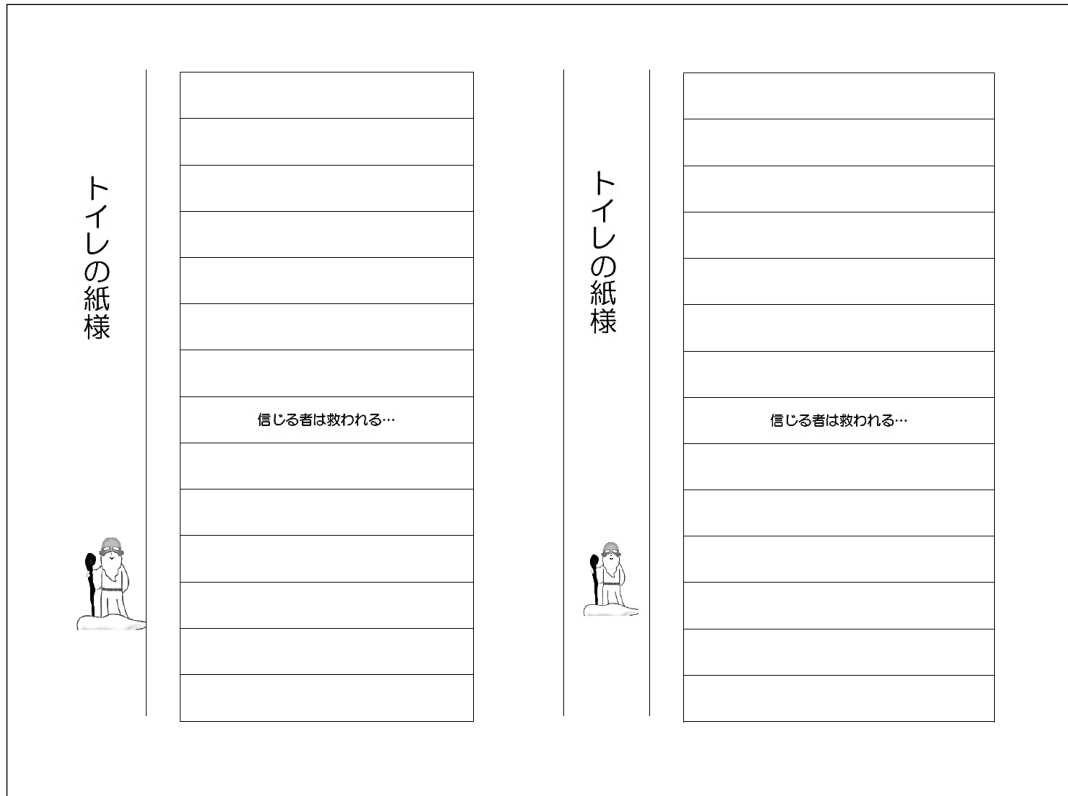


図4 支援④【トイレの紙様】

5. 分析方法

質問紙調査結果の学習状況は7月調査、10月調査、12月調査での記述統計量を算出、学習支援の活用状況は10月調査、12月調査での記述統計量を算出した。その後、国試学習開始状況による本学習支援活用状況の違いを分析するために χ^2 検定を行った。統計解析ソフトはSPSS statistics24.0を用い、有意水準は5%未満とした。

インタビュー調査のデータは①国試学習開始時期及び学習のきっかけについて、②学習支援の活用状況及び改善点、③どのようなきっかけがあると早期に国試学習に取り組めると考えるかについて、分析の視点を固定し、以下の手順で語られている内容を抽出、整理した。具体的には、前述①～③について語られている部分を抽出し、意味内容が反映できるように1内容1記録単位となるように文言を整理した。その際、対象者の語りの文言を使用したり、意味内容にずれが生じたりしていないかを逐語録に戻り確認した。最終的に1内容1記録単位として抽出されたものを前述①～③のあてはまるところに分類して整理した。分析は研究者2名で数回にわたり行い、その後、研究者全員が確認を行った。

6. 倫理的配慮

本研究は仙台青葉学院短期大学倫理委員会の承認を得た(承認番号0306)。対象者には、研究内容、研究参加の可否は学校生活への影響はないこと、すべての調査後に実施する完全匿名化処理前まで同意撤回可能であるがそれ以後は撤回できないこと、得られたデータは本研究以外で使用しないことを口頭及び文書にて説明した。また、本研究の結果は論文投稿を予定しているが、公表にあたっては個人が特定されないような表記を行うことを説明した。

本研究に関連し、開示すべき利益相反(COI)関係にある企業などはない。

V. 結果

1. 質問紙調査

研究参加の同意が得られたのは対象者86名中49名(57.0%)であった。各調査の質問紙回収数及び回収率は対象者49名中、7月調査23部(46.9%)、10月調査47部(95.9%)、12月調査44部(89.8%)となった。すべてが有効回答であった。

1) 学習開始、学習時間、学習支援活用状況、(表2)

学習を「すでに始めている」とした者は7月調査14名(60.9%)、10月調査36名(76.6%)、12月調査では38名(86.4%)であった。一方、12月時点で6名(13.6%)は「これから始める予定」としていた。「これから始める予定」「具体的に決めていない」とした者は合わせて、7月9名(39.1%)、10月11名(25.2%)、12月6名(13.6%)と国試が近づくにつれ減少していた。10月、12月と学習時間は12月調査では27名(61.4%)が休日国試学習時間2時間以上としていた。一方、1名(2.3%)は休日国試学習時間を全くとっていないなかった。

学習支援活用状況から、最も活用されていた学習支援は学習支援②【国試出題形式問題の反復学習】であり、10月調査70.2%、12月調査56.8%が活用しているとしていた。10月調査と比較して12月調査で活用が上昇した学習支援は学習支援③【模擬試験結果のキセキ】であった。学習支援①【なんかできそうだより】、学習支援④【トイレの紙様】は調査時期による活用状況に大きな差はみられなかった。

2) 学習開始と学習支援活用状況の違い(表3)

国試学習をすでに開始している群(開始群)、開始していない群(未開始群)とし、学習支援活用状況の違いを検討するために χ^2 検定を用いて両群の比較を行った。結果、学習支援①～④の活用状況は開始群、未開始群に差は認められなかった。

表2 学習開始、学習時間、学習支援活用状況

		7月調査 (n=23)	10月調査 (n=47)	12月調査 (n=44)
		n (%)	n (%)	n (%)
学習開始	すでに始めている	14 (60.9)	36 (76.6)	38 (86.4)
	これから始める予定	8 (34.8)	9 (19.1)	6 (13.6)
	具体的に決めていない	1 (4.3)	2 (4.3)	0 (0.0)
平日国試時間	0分	1 (4.3)	0 (0.0)	1 (2.3)
	30分未満	9 (39.1)	8 (17.0)	8 (18.2)
	1時間未満	7 (30.4)	16 (34.0)	15 (34.1)
	2時間未満	4 (17.4)	13 (27.7)	9 (20.5)
	2時間以上	2 (8.7)	10 (21.3)	11 (25.0)
	休日国試時間	0分	2 (8.7)	3 (6.4)
学習支援活用状況	学習支援①	–	23 (48.9)	20 (45.5)
	学習支援②	–	33 (70.2)	25 (56.8)
	学習支援③	–	25 (53.2)	30 (68.2)
	学習支援④	–	13 (27.7)	10 (22.7)

表3 学習開始と学習支援活用状況

		10月調査			12月調査		
		開始群 (n=36)	未開始群 (n=11)	<i>p</i>	開始群 (n=38)	未開始群 (n=6)	<i>p</i>
		n (%)	n (%)		n (%)	n (%)	
学習支援活用状況	学習支援①	17 (47.2)	6 (54.5)	0.671	19 (50.0)	1 (16.7)	0.198
	学習支援②	24 (66.7)	9 (81.8)	0.464	21 (55.3)	4 (66.7)	0.684
	学習支援③	21 (58.3)	4 (36.4)	0.201	27 (71.1)	3 (50.0)	0.364
	学習支援④	10 (27.8)	3 (27.3)	1.000	10 (26.3)	0 (0.0)	0.310

χ^2 検定

2. グループインタビュー調査

1) 国試学習開始時期及び学習のきっかけ (表4)

国試学習開始時期は7件の内容が抽出された。開始時期は2年次4月からが最も早く、統合実習終了後が最も遅い開始時期であった。また、「3年生の夏休みに始めたが実習開始後に一時中断、統合実習後に再開始」、「就職活動中は本格的にはしなかったが、できる範囲で取り組んだ」など実習就職活動などにより、国試学習が一時中断されていた。自己の学習開始のきっかけは7件の内容が抽出され、「心配症でコツコツやらないと心配

だった」、「周りがやっているなら、自分もやらなくてはと思った」、「模試結果が安定しない」などであった。

また、自己の国試学習の経験を踏まえて、学習のきっかけとなった内容は6件抽出された。チューター教員の関わり、周囲の学生の状況や学習方法などの情報提供をうけること、そして自己の傾向を踏まえて自分で決めることなどであった。

2) 学習支援活用状況及び改善点 (表5)

各学習支援について、実際活用して良かった点や改善点など、あわせて15件の内容が抽出された。

表4 国試学習開始時期及び学習状況、自己の学習開始のきっかけ

国試学習開始時期及び学習状況 <ul style="list-style-type: none"> ・2年生4月から開始し継続 ・2年生の必修問題集が配られた6月から開始 ・3年生4月から過去問を解答していたが、本格的には統合実習終了後の12月から開始 ・3年生の夏休みに始めたが実習開始後に一時中断、統合実習後に再開 ・統合実習終了後の12月から開始 ・実習中は実習領域ごとに参考書を基にしたまとめ問題解答は統合実習終了後から開始 ・就職活動中は本格的にはしなかったができる範囲で取り組み
自己の学習開始のきっかけ <ul style="list-style-type: none"> ・心配性でコツコツやらないと心配だった ・統合実習後に焦りを感じた ・模試結果が安定せず、分析の結果でこぼこだった ・一緒に勉強している友達との情報交換で焦りを感じた ・周りがやっているなら、自分もやらなくてはと思った ・周囲の学習状況による危機感をもった ・友人と模試結果の情報交換による危機感が生まれた
学習のきっかけになると考えること <ul style="list-style-type: none"> ・定期的に友達と話して刺激し合うのを意識すること ・国試勉強の進め方、問題の解き方など、先輩の経験などの情報 ・いつ始めるか、どう取り組むかを自分の性格などを考えて、自分で決めること ・模試結果を受けてのチューター教員の面談による具体的な指導 ・チューター教員の見守り ・他の学生の学習状況についておたよりで情報提供をうけること

表5 学習支援活用状況及び改善点

支援①【なんかできそうだから】 <ul style="list-style-type: none"> ・みんなが何をどのように勉強しているのかわかって良かった ・後半に状況設定問題の解き方やポイントがあれば良かった ・統合実習後の国試勉強が本格的に始まってからたよりがなかった ・国試勉強が本格的になったタイミングで一日の勉強スケジュールの立て方とか、過ごし方についてあれば良かった
支援②【国試出題形式問題の反復学習】 <ul style="list-style-type: none"> ・通学の電車内で活用した ・正答率90%以上の問題が不正解の場合は徹底的に復習しようと思った ・アップされた時々に解答していた ・解答が少なく、もう少し具体的だと良いと思った ・解答のみだったので、解説を調べることを考えるとそんなに利用しなかった ・教員からの声かけが取り組むきっかけだった
支援③【模擬試験結果のキセキ】 <ul style="list-style-type: none"> ・自分の模試結果の変化を確認できた ・機会がなければ自分（学生）だけでは実施しなかった
支援④【トイレの紙様】 <ul style="list-style-type: none"> ・トイレに貼ったりしていた、あってよかった ・切ったりする準備が大変でやらない人もいた ・学生が手間を加えることがないように何か工夫出来たらいい

良かった点は、学習支援①【なんかできそうだから】では「学生のインタビューを掲載したことによりクラスメイトの学習状況が等がわかって良かった」、学習支援②【国試出題形式問題の反復学習】では「通学時間に活用できる」「正答率の明示により復習の必要性を感じた」、学習支援③【模

擬試験結果のキセキ】は「模試結果の変化を確認する機会であった」などがあった。一方、改善点は学習支援①では「後半に状況設定問題の解き方やポイントがあれば良かった」、学習支援②では「解説が少ない」、学習支援④は「切ったりする準備が大変でやらない人もいた」などであった。

VI. 考察

国試学習のきっかけづくりを目指したナッジ理論を活用した学習支援の効果について考察する。

1. 最上級生の学習状況

国試学習を「すでに開始している」とした者は7月調査14名(60.9%)であった。新里ら(2015)の短期大学生を対象にした国試に関する調査では、5月時点において本格的な国試学習を始めていたとした3年生(最上級生)は30%であったと報告している[4]。本調査結果と一概に比較はできないが、本研究対象者の学習の取組みは大きくは遅れていないことが推察された。

2. 学習支援の効果

学習支援①～④の活用状況は学習開始群と学習未開始群に有意差は認められず、各学習支援が学習開始に直接、影響を与えたことは確認できなかった。

学習支援①【なんかできそうだよ】について、「みんなが何をどのように勉強しているかがわかってよかった」「情報提供を受けることでやる気や焦りなどの刺激をうける」などの意見があった。その理由として、学生の仲間である友人やクラスメイトが学習していることを知ったことで、「周りがやっているなら、自分のやらなくてはと思った」という焦りや危機感につながったと推察された。ナッジのフレームワークの〈S: Social〉の影響が考えられた。〈S: Social〉の社会的影響力は、周囲の大勢の人がその行動をとる場合、自分がどう考えたりするのが最善なのかを伝えるための〔情報〕と〔仲間からの圧力(ピア・プレッシャー)〕の2つに大別される[15]。学習支援①では、学生が〔仲間からの圧力(ピア・プレッシャー)〕の影響を受けたことが学習のきっかけにつながったと考えられた。また、学生からは、「状況設定問題の解き方やポイントがあれば良かった」「国試勉強が本格的になったタイミングであれば良かった」など、実習終了後の国試学習が本格的になった時期に学習を促進させる情報発信や発行時期について意見があった。このことから、

学生は〔情報〕としての社会的影響力も望んでいたことがわかった。国試学習は学生にとって初めて経験する課題であり、不安や戸惑いも多く[4]、試験範囲が膨大なことも困難感を増強させる要因と言えよう。藤田らは、大学生の先延ばし行動の原因について因子分析を行った結果、課題先延ばし行動に影響しているのは「興味の低さによる他事優先」と「課題困難性の認知」であったことを報告している[16]。本研究対象者は看護を自らの意思で学んでいるため、「興味の低さによる他事優先」は考えにくいことから、「課題困難性の認知」が先延ばし要因に大きく関与している可能性が考えられる。これに関しては更なる調査が必要である。いずれにしても、学習のきっかけづくりにつながる〔仲間からの圧力〕と学習を促進させる情報発信である〔情報〕とのバランスを考慮しながら、学生の学習促進及び学生の不安や困難感の軽減ができるような情報発信が今後の課題である。

学習支援②【国試出題形式問題の反復学習】は10月調査では70.2%が活用し、すでに新たな問題掲載が終了している12月調査においても56.8%が活用していた。学生の「通学の電車で活用した」「アップされた時々解答した」などの意見から、学習支援②は〈E: Easy〉に国試学習ができる学習支援として活用されていた。活用された要因として、掲載場所であったLMSは学生にとって遠隔授業の受講等で日頃から利活用している最も身近なツールであり取組みやすかったこと、複数回取組みできるように設定したことにより反復学習が可能であったことが考えられる。また、解答入力と同時に正誤が表示されるため、「正答率90%以上の問題が不正解の場合は徹底的に復習しようと思った」と新たな学習の意欲につながっていたことがわかった。国試対策として反復学習を取り入れた学習支援を行った先行研究では、反復学習を取り入れたことにより自学自習時間の延長が認められたことが報告されている[17]。本研究では、詳細な学習時間の調査は行っていないが、新たな学習の意欲へつながっていた

ことから、学習時間の延長につながった可能性も考えられた。一方、「解説が少なく、もう少し具体的だと良いと思った」等の解説を掲載していなかったことにより、学生は物足りなさを感じていた。ICTの進展によりインターネットを利用した国試対策アプリが多数存在する現在、学習支援②で発信される情報量は国試対策アプリと比べて少ないのが現状である。しかし、学生にとって身近なLMSを利用していること、低学年で学生が一度解答した問題を用いていること等の良い点もある。その良い点を最大限に生かしながら、学習支援の本来のねらいである学習のきっかけづくりと知識の定着を果たすためには、学生が興味関心〈A: Attractive〉をもてるように改善する必要がある。また、「アップされた時々解答していた」という意見があった一方、「教員からの声かけが取組むきっかけだった」との意見もあった。このことから、学生によって学習支援②の取組み状況に違いがあった。学習支援②のLMSへの問題の追加掲載は1週間に1回であることをはじめに告知しており、その都度のアナウンスは行っていなかったことが理由として考えられた。ナッジはあくまでも情報を把握した上での自発的な行動の選択であり、学習支援②については情報の周知方法が課題となった。

学習支援③【模擬試験結果のキセキ】は10月調査にて53.2%、12月調査にて68.2%が活用しており、時間の経過とともに活用は増加していた。学生の意見から、「自分の模試結果の変化を確認できた」とあり、自己の模擬試験結果の推移の〈T: Timely〉な把握に役立っていた。また、「模試結果が安定せず、分析の結果でこぼこだった」として、学習のきっかけとしてあげていた。新里らは、学生が国試に対し、自分の学力の低さ、不合格になるのではないかという不安を感じていることを指摘している [4]。国家試験の合格基準は必修問題得点が8割以上、さらに一般問題及び状況設定問題得点が60%から70%であり毎年変動している。つまり必修問題は絶対評価、一般問題及び状況設定問題は相対評価である。学生にとっ

て模擬試験結果は自分の学力を把握する機会である。模擬試験の結果が合格基準を満たさなかった場合、不合格になるかもしれないという危機感を抱き、それが学習のきっかけにつながったと考えられる。他方、模擬試験結果は教員が学生の学習状況を把握する機会ともなる。A短期大学はチューター制度学生支援を取り入れており、チューター教員は学習や就職などの個別に助言や指導を行っている。「チューター教員の見守りがやる気につながる」や「模試結果を受けてのチューター教員の面談による具体的な指導」が学習のきっかけとなると意見があった。3年課程の看護師養成所にてチューター制による学業支援を受けている看護学生を対象にした調査結果では、3年生の37%が国試への不安について支援を受けていたこと、学習面では教員の支援を受けて自立した学習ができるようになったとしていた [18]。本研究ではインタビュー調査から、先行研究の結果を支持する内容であった。今回、チューター教員が模擬試験結果を学生と共有し、学生の学習の現状を受け入れつつ、見守り学習指導を行うことが学生の国試学習のきっかけづくりや学習継続につながることを示唆された。

学習支援④【トイレの紙様】の活用は10月調査、12月調査において27.7%、22.7%と低かった。「切ったりする準備が大変でやらない人もいた」と〈E: Easy〉ではなかったことが、その要因と考えられた。一方、「トイレに貼って使用していた、あってよかった」との学生の意見があり、学習支援④を活用している学生10名にとっては効果的な学習支援であったと評価できる。学生が「あってよかった」とした理由を以下のように推察する。トイレや机上など、その場に行くことにより目に付いたときに「問い」を見て、「めくり」回答を確認するという一連の流れを繰り返すことにより知識の定着につながった可能性がある。小田は[10]小学生を対象にビンゴカードそのものが持つゲーム的要素により子どもたちの図書室利用を誘引するものとして「図書ビンゴ」を実施した。ビンゴカードが提示されることで子どもたちのスタンプ

を貯めたいという [ポジティブな期待] やビンゴを達成する [挑戦] の気持ちを誘発し、図書室利用を促したものである [10]。同様にトイレの紙様は「めくる」〈A: Attractive〉という行為を経て、知識を定着させたいという [ポジティブな期待] や自分の知識を確認する [挑戦] につながると推察される。課題として、「学生が手間を加えることがないように何か工夫できたらいい」の意見にもあるように、簡便に活用できないことが課題としてあげられた。

今回、学習支援①～④の4つの視点で学習支援を工夫して学生に提示できたことは、その活用にばらつきはあるが、学生が自分にあった学習の方法を検討する材料になったことが示唆された。そして、本学習支援は学びの主体である学生の主体性や自律性を尊重しつつ、国試学習に取り組む支援となり得たことが推察された。

3. 本研究の限界と課題

本研究の限界は対象がA短期大学のみであり、学習支援の効果を一般化することが難しいことである。さらに、今回の研究では、本学習支援が学習のきっかけづくりに与える影響が一部明らかになったが、学習支援の本来の評価までには至らなかった。今後、調査方法の検討が課題である。

VII. 結論

国試学習のきっかけづくりを目指したナッジ理論を活用した学習支援の効果を調査した結果、以下のことが明らかになった。

1. 最も活用されていた学習支援は【国試出題形式問題の反復学習】であり、約7割が活用していた。【模擬試験結果のキセキ】は10月調査より12月調査で活用が上昇した。【なんかできそうだよ】【トイレの紙様】は調査時期による活用状況に大きな差はみられなかった。
2. 学習のきっかけとなったと考えられる学習支援は【なんかできそうだよ】【国試出題形式問題の反復学習】【模擬試験結果のキセキ】であり、〈E: Easy〉〈S: Social〉〈T: Timely〉で

あったことがその要因と考えられた。一方、【トイレの紙様】の活用は約3割にとどまり、活用が〈E: Easy〉ではなかったことが要因であった。

3. 学習支援活用状況の違いによる各学習支援の活用状況に有意差は認められなかった。
4. 4つの視点で学習支援を工夫して学生に提示できたことは、学生が自分にあった学習の方法を検討する材料につながったことが示唆された。

謝辞

本研究を進めるにあたり、調査にご協力くださいました学生の皆様に深く感謝いたします。

文献

- [1] 厚生労働省ホームページ 保健師助産師看護師国家試験制度改善検討部会 報告書.
<https://www.mhlw.go.jp/content/10803000/000919424.pdf>
(2022年4月30日引用)
- [2] 大久保暢子, 佐竹澄子, 大橋久美子, 他: 看護学導入時期の学生が感じる困難性の検討. 聖路加看護学会誌. 2011; 15 (1): 9-16.
- [3] 嶋崎昌子: 看護学生の学習の実態と成績との関連-入学前教育のあり方に関する考察-. 松本短期大学研究紀要. 2018; 27: 11-20.
- [4] 新里穂久斗, 内藤雪枝, 塚本恭正: 看護師国家試験に対する学生の意識. 岩手看護短期大学紀要. 2015; 11: 47-52.
- [5] 武政奈保子, 森實詩乃, 志田久美子, 他: 看護師基礎教育の国家試験対策におけるeラーニング学習の効果の中間報告-学習理論によるインストラクション構築の段階とeラーニングの動機づけの比較-. 帝京科学大学紀要. 2015; 11: 83-93.
- [6] 小室一成: 週刊 医学のあゆみ 特集 ナッジ理論の医療への応用 はじめに. 2020; 医学書院 275 (8); 859.

- [7] 厚生労働省ホームページ 受診率向上施策
ハンドブック 明日から使えるナッジ理論
<https://www.mhlw.go.jp/content/10901000/000500407.pdf> (2022年4月30日引用)
- [8] 環境省ホームページ 学校教育を通じて脱炭素化を推進「省エネ教育の普及に向けた提言書」を発表 - 全国の小中高校等で1万名を対象に5%のCO2削減効果を実証 -
https://j-nudge.jp/education/_pdf/news_20210422_2.pdf
(2022年4月30日引用)
- [9] 環境省ホームページ 新型コロナウイルス感染症対策における市民の自発的な行動変容を促す取組(ナッジ等)の募集について(結果) - ナッジ等の具体例、留意点 -
https://www.env.go.jp/earth/ondanka/nudge/COVID-19_r.pdf
(2022年4月40日引用)
- [10] 小田郁子：「図書ビンゴ」を活用した学校図書室の実践 - 仕掛け学の学校現場での活用 -
共栄大学研究論集；2020；19：177-186.
- [11] 亀田有美，古屋健：学業場面における大学生の遅延傾向に関する基礎的研究．群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編．1996；45：353-364.
- [12] 大竹文雄（2022）：あなたを変える行動経済学 - よりよい意思決定・行動をめざして -
東京書籍株式会社．東京．pp160-164.
- [13] 大竹文雄（2022）：あなたを変える行動経済学 - よりよい意思決定・行動をめざして -
東京書籍株式会社．東京．pp168.
- [14] 安梅勅江（2007）：ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法 科学的根拠に基づく質的研究法の展開．医歯薬出版株式会社．東京．pp13-32.
- [15] Richard H. Thaler, Cass R. Sunstein/ 遠藤真美（2020）：実践 行動経済学 - 健康、富、幸福への聡明な選択．日経BP．東京．pp89-93.
- [16] 藤田正，岸田麻里：大学生における先延ばし行動とその原因について．教育実践総合センター研究紀要．2006；15：71-75.
- [17] 池宗佐知子，成島朋美，東條正典，他：過去問反復学習を取り入れた国家試験への取組みとその効果の検証．筑波技術大学テクノレポート．2012；20（1）：57-60.
- [18] 田原裕子，安藤直子：看護学生の学業支援としての教員によるチューター制の成果と課題 学業支援を受けている看護学生の視点から見た調査．神奈川県総合リハビリテーション事業団厚木看護専門学校紀要．2020；10：33-37.
- [19] 川名るり，江本リナ，吉田玲子，山内朋子，鈴木健太，楠田智子，筒井真優美：小児看護学実習における学生の「わかった！」というアハ体験 - 学びへの転換 - ．日本赤十字看護学雑誌．2021；21（1）：18-26.